

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：45407

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780468

研究課題名(和文) イギリス成人教育の一展開 バーミンガム大学ソーシャルワーク教育コースを中心に

研究課題名(英文) The process of instituting Social Study Diploma course at University of Birmingham and a development of English adult education

研究代表者

土井 貴子 (DOI, TAKAKO)

比治山大学短期大学部・その他部局等・講師

研究者番号：00413568

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：バーミンガム大学におけるソーシャル・スタディの導入過程とその実態を成人教育史のなかに位置づけ、明らかにすることを試みた。

バーミンガム大学は、ソーシャル・スタディ・コースを、成人教育団体である労働者教育協会の初期の活動を支援する過程で実施した。大学人たちは、市民の問題とどのように向き合っていくのかを模索する中でその方途の一つとして労働者成人教育を支援し、社会の問題を探求するコースの実施という取り組みを開始した。その後大学はコースを改変し、ウッドブルックと連携してソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースを実施した。講義だけでなく実習を取り入れたコースから福祉にかかわる職に従事するワーカーを輩出した。

研究成果の概要(英文)：University of Birmingham instituted a course of social study in 1905. The course was the outcome of the Workers' Educational Association Annual Conference. The courses of the lectures were given evenings under auspices of WEA. The course was consisted the lectures on philosophy, industrial history, economics etc. The lecturers were dons of University, J. H. Muirhead, W. J. Ashley. The audience was composed of working men. This course was one of the ways which University contacted with city and district. The course became a day diploma course in 1908 and training for social work in conjunction with Woodbrooke. The course was consisted of academic instruction and practical work. Practical work was visiting poor low institutions etc. The students had the opportunities of seeing of the life of the people and the actual working of the social activity. Some social students of Woodbrooke had obtained posts in conjunction with Settlement, welfare workers in factories etc.

研究分野：教育史

キーワード：成人教育史 バーミンガム大学 ウッドブルック ソーシャル・スタディ

1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまで、19世紀末から20世紀初頭のイングランドにおける成人教育史研究を、主として労働者教育協会(以下 WEA と略記)の設立と活動を明らかにすることからすすめてきた。特に、大学と労働者組織の連携という観点から、大学と生活協同組合の連携による大学拡張講義の展開、大学と労働者組織を架橋した WEA の成立と発展、地域における大学チュートリアル・クラスの実態を明らかにしてきた。

これらの研究をすすめるなかで、労働者成人学生たちが大学チュートリアル・クラス等で学んだ後、どのように学びを継続発展させていったのかに関心を持つようになった。初期の WEA の学生たちは「パンのための教育」ではなく「われらのため」として労働者階級全体の向上のために学んだ。WEA の調査によれば、WEA での学習後に公的扶助、母子福祉、青少年雇用、そして教育、福祉に関わっている者が多くいた。

20世紀前半は、国家福祉の拡大期であり、企業福祉が発展した時期でもある。こうした理由から、この時期の大学におけるソーシャル・スタディやソーシャル・ワーク教育に着目することとした。イングランドでは、1910年代にすでにソーシャル・ワーク教育をおこなっている大学が複数校存在した。ディプロマ・コースを設置している大学もあり、そのうちの1校がバーミンガム大学であった。よって本研究では、バーミンガム大学におけるソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースの導入を成人教育の展開に位置付けて考察することとした。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀前半のイギリスの大学におけるソーシャル・スタディの導入過程とその実態を成人教育史のなかに位置づけ明らかにすることを目的にしている。具体的には、バーミンガム大学においてソーシャル・スタディ・コースからはじまるソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースが設置される過程とその実態を、WEA 及びウッドブルックを中心とした成人教育機関との関わりや成人学生の学習という観点から検討する。

コース設置における大学人の意図、成人教育機関が果たした役割、コースで学んだ学生たちの実態を実証的に明らかにすることをめざした。20世紀前半の成人教育の展開を福祉国家への移行の観点から再評価することにつながると考えた。

3. 研究の方法

バーミンガム大学に所蔵されているウッドブルック関連史料である Papers of James Rendel Harris を収集し、分析した。ハリスはウッドブルックの教育ディレクターをつとめており、多くの報告書等を書き残した。そのほかにも、バーミンガム大学

のカレンダー、学長の年次報告書、評議会や学部の議事録を収集し、分析した。これら史料を用いて、成人教育の展開の上に、バーミンガム大学におけるソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースの設置過程、コースの教育及び学生の実態に明らかにすることを試みた。

4. 研究成果

(1) バーミンガム大学におけるソーシャル・スタディ・コースの開設

労働者教育協会との関係

バーミンガム大学におけるソーシャル・ワーク教育は、バーミンガム大学が1900年に大学に昇格して間もない1905-06年からソーシャル・スタディ・コースとして始まった。契機は、WEA がバーミンガムで開催した第2回年次大会にあった。1903年に設立された WEA は当時、全国に地方支部や地区組織を設け、活動の拡大をすすめていた。まだ地方組織のなかったバーミンガムで年次大会を企画し、合わせてミッドランド地区を組織することとした。WEA のミッドランド地区創設には、バーミンガム労働組合協議会やバーミンガム地区生活協同組合連合等の労働者組織だけでなく、すでに会員であった学長のオリバー・ロッジを中心としてバーミンガム大学も協力していた。

バーミンガム大学では、10月に開催される WEA の年次大会にあわせて、ソーシャル・スタディ・コースの実施を数カ月前から計画していた。学部での議論を経て、評議会での承認後、実施の運びとなった。

初期のソーシャル・スタディ・コースは、10月から5月まで、毎週火曜日の午後8時15分から大学の Medical Theatre で実施された。労働者成人を対象としていたため、夜間開講であった。

コースは、5つの科目からなり、哲学、経済学、行政学、公衆衛生など多角的に社会にかかわる問題を取り扱う内容になっていた。例えばコースの最初の科目に設定されていた「社会理想」では、知識の必要性、生活と精神の基本的事実、生活は何によって人間らしくなるのか?、社会の発展、個人主義と社会主義の5つのテーマを取り扱った。各回は、講義と討論で構成された。

講師は、「公衆衛生・住宅」を担当したバーミンガム市医務官のロバートソン以外は、全員が大学人であった。そのなかには、「社会理想」を担当した哲学教授のミュアヘッドをはじめとし、「産業団体」を担当した経済史教授のアシュリーや「社会経済学」のカーカルディ、「地方行政」のマスターマンがいた。ミュアヘッドやアシュリーといった大学の中心的な教授が講師をつとめ、大学でのソーシャル・スタディを支援した。ソーシャル・スタディ・コースの実施にあたっては、学内に実行委員会が設けられ、実行委員会が運営全般を担った。

ソーシャル・スタディ・コースは、大学にとって満足のいく成果をあげたと評価される。評価された点は、労働者成人を対象とした夜間のクラスであったが1年間にわたって出席率が下がることなく受講生が定期的に参加できたこと、毎週課されたレポートの提出率、修了時の試験の結果であった。とくに試験については、例えば1905-06年度は12名が受験をしたが、その全員が講義並びにその後の討論の内容を十分に理解しており、かつ関係文献を読み、考察をおこなっていると評価された。12名全員に修了資格が授与され、うち3名は「優等」の評価がついた。

ソーシャル・スタディ・コースの受講者は、多くがWEAを通じて受講した労働者成人たちであり、昼間は肉体労働に従事する労働者であった。かつ、主として労働組合や成人学校といった労働者階級の団体の活動に携わっており、その役員たちであった。そうした彼らがソーシャル・スタディ・コースで学ぶことの意味をWEAは、次のようにとらえていた。社会福祉の活動に直接かかわる、あるいは将来かかわることを目指すわけではない労働者たちが受講するコースであり、「社会福祉の観点から講義やクラスの結果を評価することは、簡単なことではない。」しかし当該コースは、社会的な問題に関わる内容を講義するものであり、そこでの講義と討論が労働者階級の団体の拡大とその活動に有利な影響を与えるに違いない、と。WEAは、19世紀末から主として都市において開花した「アソシエーションの文化」を背景として、労働組合や生活協同組合などの労働者階級の任意の団体に支えられて進展した団体であり、そうした団体の役員が集った団体である。ソーシャル・スタディは、こうした任意団体で活動を主導する労働者たちに社会的問題を学ぶ機会を提供したと考えられる。

このバーミンガム大学によるソーシャル・スタディ・コースは、1908-09年に大きく変化する。大学は、より総合的な計画を立て、実施する方向性へ進んでいき、WEAは、「労働者のカレッジ」を設立することをめざしていった。

(2) ソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースの実際

ウッドブルックとバーミンガム大学の連携から

ウッドブルックは、1903年10月にジョン・ウィルヘルム・ラウントリーやジョージ・キャドベリーを中心として設立された常設居住型の教育セツルメントである。宗教研究とソーシャル・スタディの実施を目的として設立された。ジョージの妻であるエリザベス・キャドベリーは、「社会問題は、科学的な知識と対応を必要とする」との立場でウッドブルックの目的を最も貧しい人々の社会的状況を学ぶことにあるととらえていた。

ウッドブルックでは、ソーシャル・スタディの実施を設立目的に掲げ、バーミンガム大学と連携する以前から「19世紀社会改革の教師たち」、「苦汁と最低賃金」、「経済学入門」、「イングランド救貧法の歴史」、「経済学と社会問題」といった科目をソーシャル・スタディ科目と位置づけ、実施していた。

ウッドブルックは、バーミンガム大学がソーシャル・スタディ・コースをソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースに改変すると同時に同大学と組織的な連携を開始した。ウッドブルックは、もともとソーシャル・スタディの実施を目的とした教育セツルメントであり、かつウッドブルックで経済学を担当していた講師のヒースがバーミンガム大学でも講義を担当し、アシユリーと親交が深かったという理由から、バーミンガム大学と連携してソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースを開始した。

コースは、講義と実習からなっていた。講義のうちおよそ半数が、ウッドブルックにおいてウッドブルックの講師たちによって提供された。ウッドブルックのソーシャル学生は、大学での講義を各学期2科目履修することとなっていた。講義の目的は、将来の専門的活動のための基礎となる一般的な知識を社会調査の結果や方法に加えて提供することにあった。対象は、まったくの初心者やこれまで経済学などを学んでない者に据えられた。

大学では、社会活動の理論と実践、産業史や産業法、救貧法の歴史と行政、公衆衛生といった科目が開設された。一方、ウッドブルックでは、基礎経済学、初心者のための政治経済学、地方政治、地方議会の活動、シティズンシップ概念の拡張、貧困問題、社会環境における宗教的側面、ギリシャにおける人生といった科目が開設された。

大学の講義は、それまでの同様にミュアヘッドやアシユリー、ティリヤードが担当した。他方ウッドブルックは、5名の講師が講義を担当した。講師は、講義だけでなく、個別に学生の学習指導にもあたった。その内容は、学習方法を示したり、助言をしたり、論文等の指導であった。

ディプロマ・コースの特徴は、実習にあった。実習は、ウッドブルックにおいてソーシャル・ワークのオーガナイザーが中心となっておこなわれた。当初は、ケンブリッジ大学ニューナム・カレッジのニューカム女史がその役割を担っていた。彼女は、実践的なソーシャル・ワークに10年間携わった経験を持ち、当時ウッドブルックに居住していた。学生がウッドブルックの所在する地区及びその近郊で実践的な経験をえられるよう個別の支援をおこなった。

ディプロマ・コースでは、少なくとも週6時間を実践活動に充てることとなっていた。Woodbrooke Guild of Help, Children's Care Committee、職業安定所、学校やクラブ・ワ

ークでの実習が計画された。実習は、学生にとって困難を抱える者たちの生活や要望を理解する機会とみなされていた。例えば、1915年から共済の掛け金の集金を目的とした個別の家庭訪問が計画、実施された。そこで地域の女性たちと直接交流することは、彼女たちが持っている要望を理解する機会となり、そして多くの場合、社会的な機関についての直接的又は間接的な知識をもつ人のアドバイスの必要性を理解する機会になると考えられた。

実習は、バーミンガム大学のソーシャル・スタディ委員会のもとに設けられた実習小委員会によって計画・調整・実施された。小委員会は、ウッドブルックを含む実習を担う3機関の代表からなる委員で構成された。実習計画を検討したり、実習準備をしたりすることなどがその目的であった。

実習の計画・実施はウッドブルックが担ったが、評価は大学がおこなった。ソーシャル・ワークのオーガナイザーは、実習に関する報告書を作成し、大学に提出することとなっていた。また学生には、実習後レポートの作成が課された。評価は大学がおこない、口頭試問も大学が実施した。

イングランドでは19世後半から20世紀にかけて、成人教育の領域に大学が関与するようになった。イングランドの成人教育史研究においては、WEAの誕生と大学チュートリアル・クラスが取り上げられ、労働者成人教育・大学成人教育の一つの到達点と評価をされてきた。ただし、バーミンガム大学では、WEAによる大学チュートリアル・クラスよりも前に、ソーシャル・スタディ・コースやソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースがWEA並びにウッドブルックと連携して実施されていた。ウッドブルックと連携したソーシャル・ワーク・コースは、上記でみたように、周延的であれディプロマ・コースとしてより正規の大学教育に近い教育を提供するものであった。

(3) ソーシャル学生

ウッドブルックに在籍してバーミンガム大学のソーシャル・ワーク・ディプロマ・コースを履修した学生は、1010-11年は10名、1911-12年は8名、1915-16年は11名、1920-21年は6名、1921-22年は6名などおおむね10名弱であった。この時期のコースの全学生の半数には及ばないが、一定の割合を占めていた。

学生には男性も含まれており、1912年頃までにコースを履修した20名の学生のうち男性10名と半数を占めた。

学生たちが課程を修了しディプロマを取得することは簡単ではなかった。最終的にディプロマを取得できた学生はさほど多くなく、毎年5名以下であった。(1909年5名、1917年5名、1918年2名、1920年5名、1922年4名、1923年3名、1924年1名)。

ソーシャル学生たちは、ウッドブルックで学んだ後、慈善組織協会、産業法委員会、女性産業評議会、社会福祉協議会、Guilds and Help、セツルメント、工場の福祉職、職業安定所などで職を得た。あるいは大学の学位コースへ進学する場合もあった。

1915年の場合、上級ディプロマ・コースで学んでいた男子学生はロンドン大学の経済学学位コースへの進学を希望していたし、普通ディプロマ・コースを履修しディプロマを取得した女子学生は修了後ロンドンで薬学を学んだ。就職を希望する学生は、工場のソーシャル・ワーカーやソーシャル・ワーカー補助職、ワーカーの秘書、あるいはセツルメントで働くことを希望していた。

学生は、中等教育を終えて学んでいる者もいたが、経済的余裕があるわけではなく、奨学金を得て学んでいる者もいた。上級ディプロマ・コースに在籍していた学生の場合も、奨学金を得られなければ学習の継続が困難になったという状況にあった。

今後、受講者の属性、学習の様子、学習のその後等より実証的に明らかにすることで大学における労働者成人教育の限界を検証することは残された課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

土井貴子, 20世紀初頭イングランドの大学成人教育におけるソーシャル・ワーク教育
ウッドブルックとバーミンガム大学の連携を中心に, 教育史学会, 2016年10月2日, 横浜国立大学。

土井貴子, 20世紀初頭イギリスにおける労働者教育協会の成人学生, 教育史学会, 2014年10月5日, 日本大学文理学部。

〔図書〕(計 1 件)

土井貴子, 「企業福祉としての教育支援
20世紀前半キャドベリー社の補習教育と人材育成」, 三時真貴子, 岩下誠, 江口布由子, 河合隆平, 北村陽子編, 『教育支援と排除の比較社会史 「生存」をめぐる家族・労働・福祉』昭和堂, 234-259頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

とくになし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土井 貴子 (DOI, Takako)

比治山大学短期大学部・幼児教育科・講師

研究者番号：00413568

(2) 研究分担者

なし。

(3) 連携研究者

なし。

(4) 研究協力者

なし。